



カンツォニッシマの1967年版)でも再び披露された。こうした日々にもかかわらず、オーラは勉強をおろそかにすることはなく、10月29日にはサンレモ都市芸術学校でデザインの教職資格試験を受けている。

11月28日に第2回カンタエウロバに出发し、「アネマ・エ・コーレ」「チム・チム・チェリー(Cam-camini)」「小さな町」を歌った。特にパリでは大成功を収め、ルフィガロ紙はオーラを“イタリア最高の歌手”であると断言した。帰国すると、新しいコンテスト番組パルティティッシマに参加、そこではクラウディオ・ビルラとトリル・

トニーとチームを組み、リタ・パヴォーネのチームを打ち負かしたのである。

1968年にオーラはテレビ女優としてデビュー。ドラマ『Le mie prigioni(意:私の監獄)』で登場人物の一人ザンゼを演じ、ラオル・グラッシリと共演した。それからオーラは「夕べのしあわせ(Sera)」を引っさげてサンレモ音楽祭に再び戻ってきた。この曲を選んだのはオーラ自身であり、作詞作曲は2人の若いカンタウトーレ、アンドレア・ロ・ヴェッキオとロベルト・ヴェッキオーニで、サンレモ音楽祭の大舞台に初めて登場したのだった。実を言えば、他にもいくつかの曲が候補とし

て挙げられていた。例えば「つばめのように(Volano le rondini)」で、この曲は後に「悲しき天使(Quelli erano i giorni)」のB面としてレコーディングされることになる。さらに「愛の花咲くとき(Quando m'innamoro)」は結局、サンレモ音楽祭のためにアンナ・イデンティチに提供されることになる。しかしこの「愛の花咲くとき」はオーラもレコーディングを行ない、特に南アメリカ諸国でヒットした。さらにはいくつかの外国語盤も作られた(スペイン語盤、フランス語盤、ドイツ語盤)。

「夕べのしあわせ」は緻密に作り上げられた難解な曲であり、その良さを正しく評価するためには何度も繰り返し聴く必要がある。しかしオーラにとっては、自分の優れた表現力を示す絶好の機会だった。この曲はヒットチャート8位だったが、批評家たちの評判は非常に良かった。当時の記事にはこう書かれている。

《……ヴェッキオーニ&ロ・ヴェッキオ作の「夕べのしあわせ」を歌うジリオラ・チンクェッティは、聴くものすべてを打ちのめした。まさしく若い頃のユーラ・デ・パルマのようで、その歌声は、愛の秘密をすべて知り尽くしている女性のように熱く官能的。そこでこんな質問を。“でもジリオラ、恋のお相手一人さえたことがないのに、どうしてそんな風に歌うことができるんだい?”ジリオラの代わりに答えたのは父チンクェッティだった。“夢というものは、怪しい現実よりもずっと激しいものだからね”ジリオラは黙ったまま、瞳を潤ませてこの上もなく甘い視線を向けていた……》

またリラ・ロッゴ女優。アルベルト・ルーポの妻)はオーラについて次のように語っている。

《素敵なジリオラ・チンクェッティ。そのうえ、この少女は数年のあいだに信じられないような進歩を遂げたのだと思う。ひとつの歌唱スタイルを身につけ、綺麗に着飾り、演技を学び、声は成熟した。これは別に大袈裟に言っているわけではなく、本当のこと。知性が女性にとって重要だと確認できて嬉しく思うわ……》